

# 魅せる城、岡山城 一天下人の風格が宿る名城—

## 第1章 プロローグ



ようこそ岡山城へ！旭川の流れを背に黒く凛々しく立つ天守。美しいですね。今日は、このドローンがあなたの『目の代わり』になり、岡山城ツアーにご案内します。屋根に寄ってみましょう。複雑に重なり合い、独特のシルエットをしていますね。こんなに屋根の重なりが美しい城は、日本でもそう多くはありません。



この天守は近年復元され、戦国から現代までの物語を刻んでいます。いわば「タイムカプセル」のような役割を果たしているのです。

……となると、およそ430年前に作られた本来の天守の姿、気になりませんか？実はこのツアー、時空旅行が 가능합니다！これから一緒に、天守が建てられた過去にさかのぼってみましょう！

さあ、意識をドローンに預けて……安土桃山時代へタイムスリップ！



## 第二章 権威の象徴・天守

時は1597年。ご覧ください、淡い光を受けて、天守の金と黒が大変よく映えます。



黒い壁には漆が贅沢に塗られ、まさに『漆黒の鎧』を纏ったよう。屋根を彩る『金箔瓦』は、当時の最高格式を示します。城主の宇喜多秀家は、豊臣政権の五大老となります。秀吉から特別可愛がられ、立身出世したからこそ許された輝きなのです。

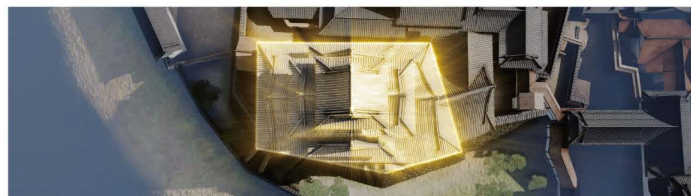


天守の足元にも注目しましょう！一見何の変哲もない石垣に見えるかもしれませんが、しかしこの時代の石垣の中では、日本屈指の高さを誇りました。

こうして見ると、とても登ろうとは思えない、凄い迫力です。城主の力を黙って見せつけていたんですね。

さらに驚くのはこの形！

土台の平面は、世にも不思議な不等辺五角形です。



実はこれ、織田信長の安土城の系譜を継ぐものと言われます。そして、安土城は西洋建築の影響を受けたとされる城です。大変難しい設計から生まれる城づくりの美学が、岡山城にも宿っていることがうかがえます。

私たち現代人から見ても複雑な構造の天守は、見る角度で表情が変わる唯一無二の美しさを生んでいます。

## 第三章 継承される城下の拡張・発展

ところであなたは、この地の由来である『岡山』がどこにあるか知っていますか？

実は、この天守の下に存在しているのです！まちが出来上がる様子を見てみましょう。

まず宇喜多直家・秀家親子は、旭川の流れを一本にまとめました。



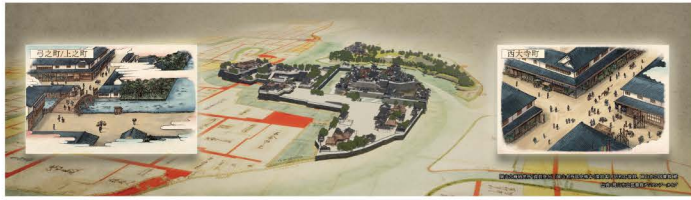
西国街道もルートを変え、京橋をかけて、人と物の流れを城の下に集めました。



そして、時代は下り 1700 年頃。池田綱政の時代には治水工事で土地が安定し、のちに後樂園と呼ばれる庭園「御後園」も整えられます。

こうして岡山のまちは最盛期を迎えました。

今、私たちが歩く岡山の街並みは、歴代の殿様たちがつないだ「長く栄えるまちの設計図」なのです！



#### 第四章 最盛期の本丸

次は 1700 年、池田綱政の時代。まちが最盛期の頃の本丸をのぞいてみましょう！

三段に分かれた曲輪の中に、多くの建物がひしめいています。実は、この構造がポイント！



このように本丸が複数段に分かれている形式は、なんと信長の安土城・秀吉の大坂城の本丸と共通しているのです。岡山城はここにも天下人級の格式が現れているんですね。

目安橋の先、正面の奥には大納戸櫓、左側には内下馬門と太鼓櫓が見えますね。戦国からの守りの構造が、まず私達を出迎えるのです。

ここからは、家臣になったつもりで本丸に入ってみましょう。門をくぐると、巨大な鏡石がドンと待ち構えます。

櫓門を見ると、少し開いた突き上げ戸の奥に、見えるのは間だけ……。



弓矢か、鉄砲か——。いつ撃たれてもおかしくない、戦国の名残の緊張が漂います。

番所の前を通りすぎ、歩みを進めると、大納戸櫓が正面にそびえ立ちます。「櫓」というより、第二の天守と言えるような巨大さです。



ちなみに、櫓の中には藩の書類とお宝がギッシリ！

火事の時には、忍者が運び出していた……そんな話も伝わります。なんだかワクワクしませんか？

奥に目を向けると、白い壁の櫓が整然と並びます。黒と白の壁の色の違いは、築かれた時代の違いを表すもの。大きく、「宇喜多の黒」に「池田の白」と言えるでしょう。

このコントラストが、岡山城の歴史の厚みを物語っているのです。

中の段に進む階段の手前には、供腰掛があります。

武家社会は大変シビアな世界……。この先は限られた武士しか入ることが許されません。ですので、お供の人はここに座り、主人が戻ってくるまで待っていました。

この腰掛は現在復元されています。帰りがけに立ち寄ってみてはいかがでしょうか。



さて、選ばれし少数の家臣たち。この先の表書院という御殿に向かいます。

「開門！」

さあ、あなたも一緒に門の中へ。

表書院は、数百人規模が入る、巨大な儀式会場です。大小 60 を超える部屋があり、多くの家臣たちが各々の位置で待機していました。



正月には大広間で年頭行事も行われます。記録によると、元旦には藩主が家臣から年賀を受け取る儀式があり、2 日目には鶴の吸い物を家臣とともにいただいていたようです。

このように大きな儀式が、数日間に渡り開かれていたんですね。

綱政はかなりの能好きでしたので、奥には能舞台もありました。やがて能舞台は取り外されますが、なくなったのではなく後樂園に移ったとされています。

一番上の本段ものぞいてみましょう。普段は使われない不明門ですが、今回は特別です。ここを通って本段へ登りましょう。登った先には藩主と家族が暮らした本段御殿があります。



右側の細長い建物は働く女性達が暮らした長局。江戸城でいう大奥のような場所です。左奥にある藩主の部屋まで、彼女達は夜な夜な通うのでしょ。

綱政は子だくさんだったので、きっとこの御殿は

「若様、廊下を走ってはなりません！」

……なんて声で賑やかだったはず。さきほどまでの、儀式的張りつめた空気とは違う、日々の営みが息づく空間でした。そして屋根越しに見える、宇喜多秀家の建てた黒い天守。本丸を巡り改めて見ると、城の象徴としてぐっと重く見えてきます。



視点を変えて、池田家を象徴する白い月見櫓をみてみましょう。打ち込みはぎと呼ばれる整然と積まれた石垣に支えられ迫力満点です。

土塀のすぐ下にある小さな穴は「笠石銃眼」と呼ばれる鉄砲用の狭間です。



当時最新の高度な技術で作られた防御設備で、敵を迎え撃ちます。

しかし、内側に回り込むと一変！高欄と廻縁を持つ、格式高い雅な空間が現れます。

月見櫓を建てた池田忠雄は、徳川家康の血を引く家柄。だからこそ、新たに櫓を建てるのができたのかもしれない。



二階からは、表書院越しに天守を見ることができます。せつかなので、入ってみましょう。

平和な時代には、ここから天守と月を眺めながら、ささやかな宴が開かれていたことでしょう。

「戦」の構えと、優美な「和」の姿。二つの顔が同居する「和戦両様」、これが月見櫓の大きな魅力の1つです。

夜も深まってきたところで、人も城も眠りにつきます。



朝がきました。

最後に、廊下門から朝の本丸をのぞいてみましょう。

門から上下2本に伸びる通路は、藩主専用の通り道。藩主の住まいである本段御殿、政務の場である表書院、休養のための花畠御殿を、廊下門を中心に結んでいます。



中でも下の段に伸びる「空中回廊」。これは全国でも珍しい構造です。先祖が織田家の家臣で信長を尊敬していることもあり、ここも安土城がルーツのようです。天下人の格式は『空中回廊の系譜』でも繋がっているんですね。

耳をすましてみてください。

藩主が本段御殿から表書院へ向かう音が聞こえるでしょうか。このころには、家臣や町人たちの日常も動き始めています。

こうして岡山城の一日は始まっていくのです。



## 第五章 エピローグ

宇喜多直家・秀家から始まり、小早川、池田と歴代の城主たちによって、時代ごとに手が少しずつ加えられ、発展してきた岡山城。

変わりゆく時代の中で、受け継がれてきたものを守りながら、戦国のタイムカプセルは、これからもこの地を訪れる人々に物語を語り続けるでしょう。

さて、私たちの旅はここまで。

現代に戻ったら、次はぜひあなた自身の足で、その歴史の痕跡を探しに出かけてみてください。

